

ヘーゲル『精神現象学』「序説」第66節～第70節の解明

YAMAGUCHI, Seiichi / 山口, 誠一

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

85

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

14

(発行年 / Year)

2022-09-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026059>

ヘーゲル『精神現象学』「序説」

第66節～第70節の解明

山口 誠 一

はじめに

ここで、哲学命題を要素とする思弁的叙述によって、哲学の真理がはじめて姿を現すことが主張されている。なお、弁証法的運動と思弁的叙述は区別されている。そのうえで、常識やロマン主義が批判されている。

《第66節》

要 旨

弁証法的運動も証明も要素は命題だという指摘がある。外からの認識という困難がつきまどってくるように見える。証明の理由づけは無際限である。しかし、弁証法的運動は基礎づけや条件づけではない。当該の運動の場面は純粹概念である。弁証法的運動の内容は主体である。主体は、通常の命題で表現されない。命題は空虚な形式である。純粹な主語は名前としての名前である。神は、名前であって、概念ではないから、避けた方がよい。存在、一者、個別性、主体は言葉としては概念である。神は基体主語にしかならない。思弁的述語も哲学的講述の仕方によっては、概念や本質にならない。哲学の叙述は、思弁的叙述によって概念をつかむことができる。

(1) 弁証法的運動も証明も要素は命題だという指摘がある。

Es kann hierüber erinnert werden, daß die dialektische Bewegung gleichfalls Sätze zu ihren Teilen oder Elementen habe;

しかしこれに関しては、弁証法的運動にしてもその諸部分あるいは要素となるものはやはり証明と同様に命題ではないか、と指摘されるかもしれない。

《註解》 言語上は、証明も弁証法的運動も命題を要素としている。

(2) 外からの認識という困難がつきまどってくるように見える。

die aufgezeigte Schwierigkeit scheint daher immer zurückzukehren und eine Schwierigkeit der

Sache selbst zu sein.

そうすると、さきあげた困難がどこまでもつきまってくるようにみえ、これは事象そのものに属する困難であるようにみえる。

《註解》《第44節》で指摘されているように、幾何学的証明の作図に見られる困難が示唆されている。それは、外からの認識であって、証明の始まりの命題に結果が含まれていないという困難である。

(3) 証明の理由づけは無際限である。

—Es ist dies dem ähnlich, was beim gewöhnlichen Beweise so vorkommt, daß die Gründe, die er gebraucht, selbst wieder einer Begründung bedürfen, und so fort ins Unendliche.

—このことは、ふつうの証明の場合に、証明で用いられた理由がそれ自身ふたたび理由づけを必要とし、こうして無際限にいたる、という事情に似ている。

《註解》 証明の理由づけは無際限である。このことが思弁的叙述にもつきまってくるようにみえる。

(4) しかし、弁証法的運動は基礎づけや条件づけではない。

Diese Form des Begründens und Bedingens gehört aber jenem Beweisen, von dem die dialektische Bewegung verschieden ist, und somit dem äußerlichen Erkennen an.

しかし、こうして基礎づけや条件づけという形式は、あの証明という外からの認識に属することであって、弁証法的運動はこれとは異なる。

《註解》 ここで、弁証法的運動は、証明のような外からの認識ではないことが明言されている。

(5) 当該の運動の場面は純粹概念である。

Was diese selbst betrifft, so ist ihr Element der reine Begriff;

弁証法的運動そのものについていえば、その場面は純粹概念なのである。

《註解》 命題による弁証法的運動は、純粹概念の内的運動なのである。

(6) 弁証法的運動の内容は主体である。

hiermit hat sie einen Inhalt, der durch und durch Subjekt an ihm selbst ist.

ために、この運動がもっている内容は、それ自身のもとで徹頭徹尾、主体である。

《註解》 弁証法的運動の内容は、主体であり、主体の形式は、弁証法的運動である。

(7) 主体は、通常の命題で表現されない。

Es kommt also kein solcher Inhalt vor, der als zum Grunde liegendes Subjekt sich verhielte und dem seine Bedeutung als ein Prädikat zukäme;

したがって、内容がそれ自身は主語として根柢にあり、それに述語として意味が付け加わってくる、

というようなことは決して生じない。

《註解》 主体は、基体主語と属性述語という命題で表現されることはない。

(8) 命題は空虚な形式である。

der Satz ist unmittelbar eine nur leere Form.

命題は直接には空虚でしかない形式である。

《註解》 通常の命題も思弁的命題も主体の真理という内容に関係しない。

(9) 純粋な主語は名前としての名前である。

Außer dem sinnlich angeschauten oder vorgestellten Selbst ist es vornehmlich der Name als Name, der das reine Subjekt, das leere begrifflose Eins bezeichnet.

空虚な無概念の一であるような純粋の主語の記号は、感性的な直観か表象において自己とされるものを別とすれば、まずは名前としての名前である。

《註解》 通常的主語は、概念ではなくて名前としての名前なのである。

(10) 神は、名前であって、概念ではないから、避けた方がよい。

Aus diesem Grunde kann es z. B. dienlich sein, den Namen Gott zu vermeiden, weil dies Wort nicht unmittelbar zugleich Begriff, sondern der eigentliche Name, die feste Ruhe des zum Grunde liegenden Subjekts ist;

この理由から、たとえば「神」という名前は避けたほうがよいであろう。なぜならば、この言葉は、ただちに同時に概念でもあるというわけではなくて、まったくの名前であり、根柢に存する主語として固定的に静止しているものだからである。

《註解》 ヘーゲルにとって、神は、主体ではなくて、実体であり、言葉としては、概念ではなくて、表象なのである。

(11) 存在、一者、個別性、主体は言葉としては概念である。

da hingegen z. B. das Sein oder das Eine, die Einzelheit, das Subjekt usf. selbst auch unmittelbar Begriffe andeuten.

なぜならば、これとちがって、たとえば「存在」とか「一」「個別性」「主体」といった言葉は、それ自身ただちに概念をも示しているからである。

《註解》 「存在」「一」「個別性」「主体」は、思考規定である。

(12) 神は基体主語にしかならない。

Wenn auch von jenem Subjekte spekulative Wahrheiten gesagt werden, so entbehrt doch ihr Inhalt

des immanenten Begriffs, weil er nur als ruhendes Subjekt vorhanden ist, und sie bekommen durch diesen Umstand leicht die Form der bloßen Erbaulichkeit.

—あの「神」という主語について、あれこれと思弁的真理が語られることがあっても、それらの真理の内容は、自分に内在する概念を欠いている。なぜならば、この場合、内容はただ静止せる主語としてそこにあるにすぎないからである。それで、この事情のために、こうした種類の真理は、えてして、ただ有難いだけのものになる。

《註解》 神についての命題は、基体主語になるので思弁的命題にならない。したがって、思弁的叙述として真理を実現しない。

(13) 思弁的述語も哲学的講述の仕方によっては、概念や本質にならない。

—Von dieser Seite wird also auch das Hindernis, das in der Gewohnheit liegt, das spekulative Prädikat nach der Form des Satzes, nicht als Begriff und Wesen zu fassen, durch die Schuld des philosophischen Vortrags selbst vermehrt und verringert werden können.

したがって、このような側面からは、思弁的な述語を概念や本質としてではなく、命題の形式にしたがつてつかむ習慣からくる障害も、それが大きくなるか小さくなるかは、哲学を講述する仕方のせいであるといえよう。

《註解》 神を主語にして命題で真理を表現しようとする講述をすると、思弁的述語も概念や本質にならない。

(14) 哲学の叙述は、思弁的叙述によって概念をつかむことができる。

Die Darstellung muß, der Einsicht in die Natur des Spekultativen getreu, die dialektische Form behalten und nichts hereinnehmen, als insofern es begriffen wird und der Begriff ist.

哲学の叙述では、思弁的なものの本性として洞察されたところを忠実に守って、弁証法的形式を堅持し、概念把握され概念であるかぎりのもの以外はいっさい取り入れないようにしなければならない。

《註解》 概念を命題による弁証法的運動という形式を堅持して哲学の叙述がなされるべきである。

[3] 健全な常識としての、また天才の靈感としての自然的な哲学思索

《第67節》

要 旨

理屈をつける態度ばかりでなく、理屈をつけることなく既定の真理にうぬぼれている態度も、基体真理を前提している点で哲学研究を妨げる。哲学することは、真剣な仕事である。何かを身につけるためには、修得や練習が必要である。だが、靴のサイズと哲学の心得が同じであってすぐわかるかのように考えられる。その結果、哲学を身につけることと知識や研究は対立させられる。真理は哲学によってだけ産出される。

- (1) 理屈づけする態度ばかりでなく、理屈づけすることなく既定の真理にうぬぼれている態度も、**基本真理を前提している点で哲学研究を妨げる。**

Sosehr als das rasonierende Verhalten ist dem Studium der Philosophie die nicht rasonierende Einbildung auf ausgemachte Wahrheiten hinderlich, auf welche der Besitzer es nicht nötig zu haben meint zurückzukommen, sondern sie zugrunde legt und sie aussprechen sowie durch sie richten und absprechen zu können glaubt.

〔上に問題にしてきたような〕理屈づけする態度ばかりでなく、理屈づけすることなく既定の真理にうぬぼれている態度も、哲学の研究にとって同様に大きな障害となっている。そのような真理をもっているつもりの方は、あらためてその真理に立ち返って考察する必要はないと思っている。むしろ、そういう人はその真理をいつも根柢に置き、それを宣言してよいばかりでなく、それによって事を裁いたり^{しりぞ}斥けたりすることができると思じている。

《註解》 真理を根柢に置くとは、真理を静止した命題表現と考える態度である。

- (2) **哲学することは、真剣な仕事である。**

Von dieser Seite tut es besonders not, daß wieder ein ernsthaftes Geschäft aus dem Philosophieren gemacht werde.

こうした側面から、哲学するというのを、ふたたび真剣な仕事であらしめることが、とくに必要である。

《註解》 真剣さとは、虚栄ではなくて内在的だということである。

- (3) **何かを身につけるためには、修得や練習が必要である。**

Von allen Wissenschaften, Künsten, Geschicklichkeiten, Handwerken gilt die Überzeugung, daß, um sie zu besitzen, eine vielfache Bemühung des Erlernens und Übens derselben nötig ist.

どんな学問や技術や技巧や手仕事についても、それを身につけるためには、苦勞をかさねて修得し練習する必要があることは、世間で一般に納得されている。

《註解》 哲学でも修得や練習が必要であることを示唆している。

- (4) **だが、靴のサイズと哲学の心得が同じであってすぐわかるかのように考えられる。**

In Ansehung der Philosophie dagegen scheint jetzt das Vorurteil zu herrschen, daß, wenn zwar jeder Augen und Finger hat, und wenn er Leder und Werkzeug bekommt, er darum nicht imstande sei, Schuhe zu machen, jeder doch unmittelbar zu philosophieren und die Philosophie zu beurteilen verstehe, weil er den Maßstab an seiner natürlichen Vernunft dazu besitze, – als ob er den Maßstab eines Schuhes nicht an seinem Fuße ebenfalls besäße.

ところが哲学については、〔逆の〕先入見がいまでは支配的になっているようである。それによると、だれもが目と指とをもっているからといって、皮と道具を手にしさえすれば靴が作れるというわけではないけれども、哲学の場合には、各人は自分の自然なままの理性において哲学のための規準をもっているのであるから、だれもが、いかに哲学し、いかに哲学を評価すべきかを直接に心得ている、というのである。これではまるで、靴の場合でも規準を自分の足にもっているのではないかのような口ぶりである。

《註解》 自分の足に対応するのは、自然の理性であり、靴のサイズに対応するのは、哲学の心得であるかのように考えられる場合がある。

(5) その結果、哲学を身につけることと知識や研究は対立させられる。

—Es scheint gerade in den Mangel von Kenntnissen und von Studium der Besitz der Philosophie gesetzt zu werden und diese da aufzuhören, wo jene anfangen.

こうなると、哲学を身につけることは、まさに知識や研究が欠けているところで成り立ち、知識や研究がはじまれば、そこでは哲学はやむかのようなのである。

《註解》 哲学を身につけることと知識や研究が対立させられる結果、後者がはじまれば、哲学はやむかのようなになる。

(6) 真理は哲学によってだけ産出される。

Sie wird häufig für ein formelles inhaltleeres Wissen gehalten, und es fehlt sehr an der Einsicht, daß, was auch dem Inhalte nach in irgendeiner Kenntnis und Wissenschaft Wahrheit ist, diesen Namen allein dann verdienen kann, wenn es von der Philosophie erzeugt worden; daß die anderen Wissenschaften, sie mögen es mit Rasonieren ohne die Philosophie versuchen, soviel sie wollen, ohne sie nicht Leben, Geist, Wahrheit in ihnen zu haben vermögen.

一般に哲学は、形式的で内容空虚な知識だと見なされることが多い。ここにいちじるしく欠けているのは、つぎのことがらに対する洞察である。すなわち、なんらかの知見や学問において内容的には真理であるものも、それが真理という名に値しうるのは、それが哲学によって産み出されたときのみなのである。また、ほかのあらゆる学問は、それが哲学なしでどれほど理屈づけを試みようと、哲学なしには、生命も、精神も、真理も、自分のうちにもつことができないのである。

《註解》 哲学による思弁的叙述がなされなければ、他のあらゆる学問は、生命、精神、真理を得ることができない。

《第68節》

要 旨

神的な直接の啓示や、常識が形成陶冶の長い道程の代わりに持ち出される。神的な直接の啓示や、常識は思考を抽象命題につなぎとめることもできない。ロマン主義は詩から哲学に移った。天才による創造は、気違いじみた言辞になった。ロマン主義の直観的詩作的思索はでたらめな混ぜものである。

(1) 神的な直接の啓示や、常識が形成陶冶の長い道程の代わりに持ち出される。

In Ansehung der eigentlichen Philosophie sehen wir für den langen Weg der Bildung, für die ebenso reiche als tiefe Bewegung, durch die der Geist zum Wissen gelangt, die unmittelbare Offenbarung des Göttlichen und den gesunden Menschenverstand, der sich weder mit anderem Wissen noch mit dem eigentlichen Philosophieren bemüht und gebildet hat, sich unmittelbar als ein vollkommenes Äquivalent und so gutes Surrogat ansehen, als etwa die Zichorie ein Surrogat des Kaffees zu sein gerühmt wird.

本来の哲学という見地からすると、以下のような事態がみられる。元来、精神が哲学としての知識に到達するためには、豊かにして深い運動を経験し、形成陶冶の長い道程を歩まねばならない。ところがいまではそのかわりに、神的な直接の啓示や、常識、それも本来の哲学的思索においてか他の知識分野において、苦勞したことも陶冶されたこともない常識が、もちだされる。そして哲学にとって、これらがただちに、〔精神のあの長くきびしい形成過程と〕完全に等しい価値をもち、立派にその代用になる、と考えられている。ちょうど、^{きくぢしろ}菊蒿草の根がコーヒーの代用品としてもはやされるようなものである。

《註解》「精神が哲学としての知識に到達するためには、豊かにして深い運動を経験し、形成陶冶の長い道程を歩まねばならない」とは、精神現象学の道程を指す。

(2) 神的な直接の啓示や、常識は思考を抽象命題につなぎとめることもできない。

Es ist nicht erfreulich zu bemerken, daß die Unwissenheit und die form- wie geschmacklose Roheit selbst, die unfähig ist, ihr Denken auf einen abstrakten Satz, noch weniger auf den Zusammenhang mehrerer festzuhalten, bald die Freiheit und Toleranz des Denkens, bald aber Genialität zu sein versichert.

一抽象的な命題に、ましてやそれらの命題どうしの連関に、思考をつなぎとめておくこともできないような、無知にして、品も味もない粗野にほかならぬものが、やれ思考の自由と寛容でございの、やれ天才の真髓だのと言いつらされているのを見るのは、愉快的なことではない。

《註解》ここでは、ロマン主義が批判されている。

(3) ロマン主義は詩から哲学に移った。

Die letztere, wie jetzt in der Philosophie, grassierte bekanntlich einst ebenso in der Poesie;

この天才ということは、いまは哲学で流行しているが、周知のように、すこし前は詩においてそうであった。

《註解》 天才はロマン主義が主張していた。

(4) 天才による創造は、気違いじみた言辞になった。

statt Poesie aber, wenn das Produzieren dieser Genialität einen Sinn hatte, erzeugte es triviale Prosa oder, wenn es über diese hinausging, verrückte Reden.

しかし、あのころ、天才による創造ということが意味をもっていたとすれば、それは、詩のかわりに陳腐な散文を産み出したことであり、散文以上のものになったときは気違いじみた言辞であった。

《註解》 同じ天才による創造が詩だけではなくて哲学的散文を産み出した。

(5) ロマン主義の直観的詩作的思索はでたらめな混ぜものである。

So jetzt ein natürliches Philosophieren, das sich zu gut für den Begriff und durch dessen Mangel für ein anschauendes und poetisches Denken hält, bringt willkürliche Kombinationen einer durch den Gedanken nur desorganisierten Einbildungskraft zu Markte - Gebilde, die weder Fisch noch Fleisch, weder Poesie noch Philosophie sind.

現代の、自然なままの哲学的思索というのも、これと同じようなことになる。それは、概念の形をとるには自分は上等すぎると思い、概念なしでやってゆくからには直観的な詩作的思索なのだと得意になっている。そして、なまじ思想が入っているため形^{かた}なしになった想像力で、でたらめな混ぜものをこさえあげ、売りに出す。これはもう魚とも肉とも、詩とも哲学ともつかぬ代物なのである。

《註解》 直観的詩作的思索は自然なままの哲学でロマン主義の立場である。

《第69節》

要 旨

自然なままの哲学的思索は、平々凡々な真理の話術にもなる。常識の究極は、無垢の心や良心の純潔である。この究極は明るみに出されるべきである。究極的な最上のもはこれまでも教理問答集や民衆の諺としてあった。これまでの真理は、曖昧で不都合で矛盾していた。詭弁という言葉は、低俗な常識の決まり文句である。常識の究極は感情である。人間性の根は感情にはない。理性とは、普遍的一致であり、多くの意識の共同の成り立ちである。感情は、反人間的であり、動物的である。

(1) 自然なままの哲学的思索は、平々凡々な真理の話術にもなる。

Dagegen im ruhigeren Bette des gesunden Menschenverstandes fortfließend, gibt das natürliche Philosophieren eine Rhetorik trivialer Wahrheiten zum besten.

これとは逆に、おだやかな常識の河床にそって流れてゆく場合には、自然なままの哲学的思索は、平々凡々な真理の話術で、もてなしてくれる。

《註解》 自然なままの哲学思索は、常識にもなる。

(2) 常識の究極は、無垢の心や良心の純潔である。

Wird ihm die Unbedeutendheit derselben vorgehalten, so versichert es dagegen, daß der Sinn und die Erfüllung in seinem Herzen vorhanden sei, und auch so bei anderen vorhanden sein müsse, indem es überhaupt mit der Unschuld des Herzens und der Reinheit des Gewissens und dgl. letzte Dinge gesagt zu haben meint, wogegen weder Einrede stattfindet noch etwas weiteres gefordert werden könne.

自然なままの哲学的思索に対し、これらの平凡な真理は大して意味がないと難をつけると、その思索は、意味や充実は自分の心の内にあり、他の人々においてもそのはずだ、と言い張る。それというもの、自然的哲学思索は、一般に、^{むく}無垢の心とか良心の純潔とかをもちだせば究極的なものを語ったつもりであり、これに対してはもう口をさしはさむことも、何かそれ以上のものを求めることも許されぬ、と思っているのである。

《註解》 常識によれば、無垢の心や良心の純潔は誰にでもある究極である。

(3) この究極は明るみに出されるべきである。

Es war aber darum zu tun, daß das Beste nicht im Innern zurückbleibe, sondern aus diesem Schachte zutage gefördert werde.

しかし問題であるのは、最上のものを内にひきこもったままにしておかないで、この堅坑から明るみに出すことだった。

《註解》 究極的な最上のものを概念化することが問題である。

(4) 究極的な最上のものはこれまでも教理問答集や民衆の諺としてあった。

Letzte Wahrheiten jener Art vorzubringen, diese Mühe konnte längst erspart werden, denn sie sind längst etwa im Katechismus, in den Sprichwörtern des Volks usf. zu finden.

しかも、あのような種類の究極的真理ならば、それらを言い立てるために苦勞することは、とうに必要でなくなっている。というのは、ずっと前から、たとえば教理問答集だとか民間の^{ことわざ}諺などのなかに、それらを見つけることもできたのだからである。

《註解》 概念的でなければ、究極的真理は、表象や比喩として存在していた。

(5) これまでの真理は、曖昧で不都合で矛盾していた。

—Es ist nicht schwer, solche Wahrheiten an ihrer Unbestimmtheit oder Schiefheit zu fassen, oft die gerade entgegengesetzte ihrem Bewußtsein in ihm selbst aufzuzeigen.

この真理とされているものに対し、その曖昧^{あいまい}なところや不都合なところを指摘するのは、むつかしいことではない。そして、この真理を意識している人々に対し、しばしばそれと正反対のものが当の意識自身のなかにふくまれているのを示してみせるのもむつかしいことではない。

《註解》「それと正反対のものが当の意識自身のなかにふくまれている」というのは、常識が否定する矛盾である。

(6) 詭弁という言葉は、低俗な常識の決まり文句である。

Es wird, indem es sich aus der Verwirrung, die in ihm angerichtet wird, zu ziehen bemüht, in neue verfallen und wohl zu dem Ausbruche kommen, daß ausgemachtermaßen dem so und so, jenes aber Sophistereien seien, - ein Schlagwort des gemeinen Menschenverstandes gegen die gebildete Vernunft, wie den Ausdruck Träumereien die Unwissenheit der Philosophie sich für diese ein für allemal gemerkt hat.

かれらは、こうして自分の意識にひきおこされた混乱からのがれようと努力しても、また新たな混乱におちいるだけであり、おそらく最後には爆発してしまって、「真理がかくかくであることは、はじめからきまっているのであって、それに対するこうしたやり方は詭弁^ゐにほかならぬ」となるであろう。—この「詭弁」という言葉は、低俗な常識が教養ある理性にむかって投げつけるきまり文句であり、ちょうど、哲学に対する無知が、哲学に「夢想」という表現をきっぱりと貼り付けるのと、同様である。

《註解》哲学の真理を思弁的に叙述しようとするのに対して、この叙述を否定する常識の立場を批判している。

(7) 常識の究極は感情である。

—Indem jener sich auf das Gefühl, sein inwendiges Orakel, beruft, ist er gegen den, der nicht übereinstimmt, fertig;

この立場の人々は、感情という自分の内なる神託に訴えるのであるから、自分と一致しない者に対しては態度がはじめからきまっている。

《註解》ここでは、ヤコービやシュライアマッハーが念頭に置かれている。

(8) 人間性の根は感情にはない。

er muß erklären, daß er dem weiter nichts zu sagen habe, der nicht dasselbe in sich finde und fühle; —mit anderen Worten, er tritt die Wurzel der Humanität mit Füßen.

そういう人は、「同じものを自分のなかにも見いだし、同じものを自分で感ずるのでないような人に対

しては、もはや何も言うことはない」と宣言するにちがいない。このことを言いかえれば、かれらは人間性の根を踏みにじるのである。

《註解》ヘーゲルは人間性の根を理性に求めている。

(9) 理性とは、普遍的一致であり、多くの意識の共同の成立である。

Denn die Natur dieser ist, auf die Übereinkunft mit anderen zu dringen, und ihre Existenz nur in der zustande gebrachten Gemeinsamkeit der Bewußtsein[e].

なぜならば、人間の本性は、他の人々との一致を求めて進むことにあり、多くの意識の共同が成立するところのみ、人間性は現存するのだからである。

《註解》理性とは、人間の本性であり、普遍性である。

(10) 感情は、反人間的であり、動物的である。

Das Widermenschliche, das Tierische besteht darin, im Gefühle stehenzubleiben und nur durch dieses sich mitteilen zu können.

反人間的であること、動物的であること、それは、感情にとどまり、感情によってしか心を伝えあえないということにほかならない。

《註解》ここでは、ヘーゲルは、感情によるコミュニケーションを否定している。

《第70節》

要 旨

学に到る王道では、常識によれば、哲学著作に関する評論さらにはその序説の始めを読めばよい。序説と始めとは一般的根本命題や外からの評価にすぎない。永遠や聖や無限にかかわる高貴の感情も批判されなければならない。思弁的叙述では、ロマン主義の深みは到ることがないという。思弁的叙述は、概念の労苦による。真理とは自己意識的理性の所有である。

(1) 学に到る王道では、常識によれば、哲学著作に関する評論さらにはその序説の始めを読めばよい。

Wenn nach einem königlichen Wege zur Wissenschaft gefragt würde, so kann kein bequemerer angegeben werden als der, sich auf den gesunden Menschenverstand zu verlassen und, um übrigens auch mit der Zeit und mit der Philosophie fortzuschreiten, Rezensionen von philosophischen Schriften, etwa gar die Vorreden und ersten Paragraphen derselben zu lesen;

学にいたる「王者の道」を問われた場合、常識を頼りにし、そのほかは、時勢や哲学界の現状に遅れをとらないように、哲学著作についての書評と、できればその著作の序説と最初の数節くらいを読むという、これ以上に安楽な道を示すことはできまい。

《註解》 ここで、学に到る王道が常識批判であることが示唆されている。

(2) 序説と始めとは一般的根本命題や外からの評価にすぎない。

denn diese geben die allgemeinen Grundsätze, worauf alles ankommt, und jene neben der historischen Notiz noch die Beurteilung, die sogar, weil sie Beurteilung ist, über das Beurteilte hinaus ist.

つまり、序説と最初の数節とは、すべてがそれにかかっている一般的な根本命題を与えてくれるし、書評のほうは、メモの並べ立てのほかには評価も与えてくれ、この評価たるや、それが評価であるというだけの理由で、評価されたものより上にある、というわけである。

《註解》 非具体的な一般的根本命題や外からの評価は学へ到る王道ではない。

(3) 永遠や聖や無限にかかわる高貴の感情も批判されなければならない。

Dieser gemeine Weg macht sich im Hausrocke; aber im hohenpriesterlichen Gewande schreitet das Hochgefühl des Ewigen, Heiligen, Unendlichen einher - einen Weg, der vielmehr schon selbst das unmittelbare Sein im Zentrum, die Genialität tiefer origineller Ideen und hoher Gedankenblitze ist.

この通俗の道は平服のまま行ける。ところが、永遠や聖や無限にかかわる高貴の感情となると、高僧の衣冠をつけて威風堂々とまかり通る。それが練り歩く道は、もうそれ自体がすでに直接的な存在のまっただなかなのであり、天才の深く独創的な理念、高きにひらめく思想の火花、ということになっている。

《註解》 ここでまたロマ主義批判へ戻る。

(4) 思弁的叙述は、ロマン主義の深みは到らない。

Wie jedoch solche Tiefe noch nicht den Quell des Wesens offenbart, so sind diese Raketen noch nicht das Empyreum.

しかし、この深みははまだ本質体の源をあらわすものでなく、この花火もいまだ最高天の火ではない。

《註解》 概念は、本質体の源とも最高点の火とも喩えられている。

(5) 思弁的叙述は、概念の労苦による。

Wahre Gedanken und wissenschaftliche Einsicht ist nur in der Arbeit des Begriffs zu gewinnen. 真の思想と学的洞察は、概念の労苦によってのみ獲得されるのである。

《註解》 「真の思想と学的洞察」とは思弁的叙述を指す。

(6) 真理とは自己意識的理性の所有である。

Er allein kann die Allgemeinheit des Wissens hervorbringen, welche weder die gemeine Unbestimmtheit und Dürftigkeit des gemeinen Menschenverstandes, sondern gebildete und vollständige

Erkenntnis, noch die ungeweine Allgemeinheit der durch Trägheit und Eigendünkel von Genie sich verderbenden Anlage der Vernunft, sondern die zu ihrer einheimischen Form gediehene Wahrheit [ist], —welche fähig ist, das Eigentum aller selbstbewußten Vernunft zu sein.

概念のみが知識の普遍性を産み出すことができる。この普遍性は、ありふれた常識の曖昧さや貧弱さのことではなく、形成陶冶された完全な認識であり、また、天才の怠惰と独善のために駄目になった理性素質による、一般には通用しない普遍性ではなく、理性本来の形式にまで成長した真理、すべての自己意識的な理性にとってその所有たりうる真理である。

《註解》 自己意識的理性の所有である真理が普遍的概念であり、形成陶冶された完全認識である。それは、常識のありふれた一般性でもないし、天才と独善にまといつかれた理性素質でもない。

結びに代えて

ここで、哲学体系は、概念の弁証法的運動による思弁的叙述であることが主張されている。ヘーゲルの著作では、ここだけが哲学体系の説明になっていることに注意されたい。

引用文献略号

GW: Georg Wilhelm Hegel, *Gesammelte Werke in Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft*. Hrsg. v. der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften. Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1968ff. (*GW*の後に巻数と頁数を記してある。)

KdrV: Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*. Verlag von Felix Meiner, Hamburg, 1956. (*KdrV*の後に第二版頁数の場合には、頁数の前にBと記してある。)

凡 例

1. 原文の隔字体は、本論稿ではイタリック体で表記し、訳文では傍点を付した。
2. 訳文については、「精神現象学・序論」、山本信訳、岩崎武雄責任編集・解説『世界の名著 35・ヘーゲル』所収、中央公論社、昭和42年を参照した。
3. 訳文中の亀甲で括った表記は、筆者による挿入である。

Explikation der *Phänomenologie des Geistes* Hegels
(Absätze 66–70)

YAMAGUCHI, Seiichi

Zusammenhang

Es erhellt in dieser Stelle, dass das philosophische System die spekulative Darstellung der dialektischen Bewegung des philosophischen Satzes ist. Diese Systemansetzung Hegels spricht sich nur in dieser Stelle. Auf diesem Standpunkt hat Hegel etwas gegen die Philosophie des gesund Menschenverstandes und Romanticismus.